

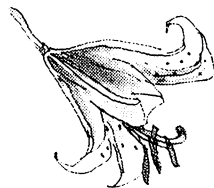
# 大無量寿経

平川

彰

大無量寿経は大蔵経では「佛説無量寿経」となっておりまして、大の字はついておりません。しかし大の字のついた「大無量寿経」が有名なものは、親鸞聖人が「教行信証」の中で、「夫れ真実の教を顕わさば、則ち大無量寿経これなり」と説かれまして、大無量寿経を「真実の教」とたたえられ、これに大の字をつけて呼んでおられます。このことが、「大無量寿経」の名が広くひろまったのに力があつたと

思います。それから、阿弥陀経を「小経」といいまして、無量寿経を「大経」と呼ぶことも、大無量寿経の呼称がおこなわれる理由の一つであろうと思います。阿弥陀経と無量寿経とは、漢訳では経名が違いますが、しかし阿弥陀経の阿弥陀には「無量寿・無量光」の意味がありますので、無量寿経というのも、阿弥陀経というのも、意味は同じなのであります。



そして無量寿経も阿弥陀経も、梵文では同じ名称で呼ばれています。それは「スカールヴァティ・ヴェーハ」（極楽の莊嚴）というのでして、無量寿経にも阿弥陀経にも同じ「スカールヴァティ・ヴェーハ」という名がついています。ただ阿弥陀経は小さな經典でして、極楽の結構を簡単に説いています。故に漢訳では、いそいで読めば五分か十分で読むことができます。これにたいして無量寿経には、阿弥陀佛の因位である法蔵菩薩の本願の建立からはじめて、浄土の建立、浄土の結構を詳しく述べております。そして、阿弥陀佛のそなえる徳についても詳しい説明があります。そのために分量も多く、二巻に分れておりまして、早口で読誦しても一時間以上かかりません。

なお阿弥陀佛の浄土の結構を詳しく説いている經典には、無量寿経と阿弥陀経と共に、観無量寿経があります。これは阿弥陀佛や極楽を観想することを説いた經典でして、有名な韋提希夫人の受難がこの

経を説く発端になっています。そして以上の三経を「浄土三部経」といって、浄土教の教理を説いている重要な經典であります。

大無量寿経にはまずはじめに、釈尊が王舎城の耆闍崛山におられたとき、比丘の大衆、菩薩の大衆が集ったことを述べています。これを聴聞衆といえます。次にここに集まった菩薩は普賢菩薩・文殊菩薩・慈氏菩薩等、すでに菩薩の修行を完成した大菩薩であることを述べ、一会の間に一切の佛国に至って、一切衆生を済度し、無量の功徳を積んでいることを述べています。かかる大菩薩が数え切れないほど多数に來会しています。

そして教主の釈尊もこの時は特別に、諸根が喜びにあふれ、姿色が清浄で、顔色も光り輝いて、特別な教えを説こうとしておられる様子が見えます。この釈尊の容色の普通でないのに、阿難の心が動かされて、本日世尊はどのような教えを説いて下さるのでしょいかと質問をします。この阿難のお願いに

応じて、釈尊の説法がはじまります。

まずはじめに阿弥陀佛の「因の位」である法蔵菩薩の浄土建立の本願について述べます。過去久遠無量不可思議無央数劫の昔に錠光如来がこの世に現われました。そしてその後多くの佛が相ついで現われまして、衆生を済度されましたが、世自在王佛の時になって、一人の王が佛の教えを聞いて、無上道になつて、出家して法蔵菩薩と名乗られました。そして世自在王佛の導きによって、諸佛の佛国土を詳しく見て、五劫思惟の結果、浄土を建立せんとして、四十八の本願を建てました。そして兆載永劫の修行の結果、本願を満足して、浄土を建立されたのであります。

同時に自らは阿弥陀佛（無量の光明と無量の寿命を持つ佛陀）とられたのです。この無量寿佛のお徳を、大無量寿経では、光明の佛陀として示しています。具体的に言いますと、無量光佛・無辺光佛・無礙光佛・無対光佛・炎王光佛・清淨光佛・歓喜光

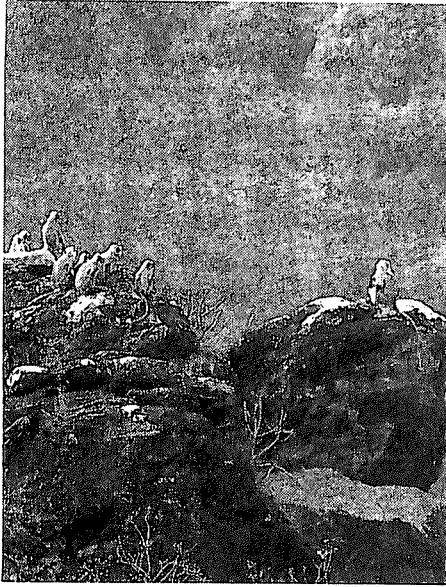
佛・智慧光佛・不断光佛・難思光佛・無称光佛・超日月光佛の「十二光佛」であります。

この「光明の佛陀」ということが、親鸞聖人が阿弥陀佛を理解する重要なポイントとなっております。とくに親鸞聖人は「不可思議光佛」という呼び方を好んで用いられました。如来の不可思議な光明に自己が光被されているという体験が、親鸞聖人の信仰の中核になっていると思います。正信偈にも「撰取の心光つねに照護したもう」と説かれ、或いはまた「煩惱に眼さえられて見たてまつらずと雖も、大悲ものうきこと無くして、常に我を照らしたもう」とも説いておられます。

如来の大悲の光明に、自己が照らされ護られているという宗教体験が、大無量寿経の示そうとしているところであると思います。故に大無量寿経には、「それ衆生ありて、この光りに遇う者は三垢消滅して、身と意と柔軟じゅうなんなり。歓喜踊躍ゆびやくして、善心生ず。もし三塗勤苦のところ<sup>に</sup>在りて、この光明を見たて

まつれば、みな休息を得て、また苦悩なし」と説いています。如来の光明は、あらゆる衆生の苦悩をしずめる力があるのです。如来の光明を、そういう受けとめ方で受けることが大切であると思います。しかし実際には衆生は煩惱に智慧の眼が障害されて、如来の摂取の光明に自己が照らされていることを知らないのです。

釈尊が極楽浄土の結構を説いたあとに、阿難等に



大無量寿経の説かれた霊鷲山山頂付近

無量寿佛を礼拝することをすすめます。そのすすめに応じて、阿難は衣服を整え、正身西面して無量寿佛を礼拝します。そして彼の佛国を見ることを願いました。その言葉に応じて、無量寿佛は大光明を放つて、あまねく一切の諸佛世界を照らされたのです。

そして此の土の金剛圍山・須弥山王・大小の諸山、一切のものはすべて佛の光明に照らされて一色となり、たとえば劫水が世界を彌満びまんして、万物がその中に沈没して現れないように、阿弥陀佛の光明に一切は隠蔽され、佛の光明のみが明曜顕赫として、一切を照らしたのです。そして阿弥陀佛は威徳巍巍として、須弥山王の如く一切世界の上に高くそびえ、相好光明照耀せずということはなかったのです。この阿弥陀の光明を、この土の一切衆生は佛の威神力によって見ることができたのであります。

このように大無量寿経では、無量寿佛が光明の佛陀であることを詳しく述べています。そしてその後で、無量寿佛の寿命は長久で、称計すべからざるこ

とを説いています。そして浄土の声聞・菩薩・天人衆の寿量も佛と同じであり、その数は無量無数であると説いております。

大無量寿経では、阿弥陀佛が無量寿・無量光の佛であることを説いたあとで、極楽の結構について詳しく述べています。安養国土は七宝でできた美しい国土であります。そこには天の優鉢羅華・鉢曇摩華・拘物頭華・分陀利華等の各種の蓮華に覆われた宝池があります。極楽の衆生はこの池に入って水浴をします。この池に入ると、冷煖自然に意に随い、神（心）を開き、体を悦ばしめ、心垢を蕩除するといひます。さらに極楽には風が吹いて木々を鳴らし、無量の自然の好声があります。さらに食鉢には意に随って百味の飲食が自然に盈満えいまんするといひます。しかも極楽の衆生はその食物をたべなくとも自然に飽食するといひます。このように極楽には種々の樂があり、「三塗苦難あることなく、ただ自然快樂の音のみあり。是の故に其の国を名けて極楽という」と

説いています。

しかし極楽の結構については小本の阿弥陀経にも詳しく説かれていますので、大本の大無量寿経の特色は、阿弥陀佛を光明無量の佛陀と説いている点にあると考えます。そしてそこに、觀経や小経をさしおいて、親鸞聖人が大無量寿経を「眞實の教」と理解された理由があると思います。

その次に大無量寿経の特色は、極楽に往生する方が説かれている点であります。衆生が極楽に往生し得る根拠は、法藏菩薩の本願にあります。法藏菩薩が衆生を救済する本願を立てられたから、その本願に乗託して、衆生は極楽に往生しうるので。世の中のことは、自然の道理に基づいて行われることと、人間の意志に基づいて行われることがあります。例えば人間は、自然の道理に背いて生きていくことはできません。しかしよりよい生活を実現しようと思えば、その上に努力が必要です。現代の文明社会の成立は人間の意志、努力による点が大きいです。

例えば原子爆弾なども、人間の意志によって作られたわけです。人間が作ろうと思わなければ、原爆ができる筈はないのです。

極楽浄土の建立は法蔵菩薩の本願によって修起されたものであると言われていますが、とくに衆生が極楽に往生することは、四十八願のうちの、第十八・十九・二十の三つの願に示されています。第十八願には「十方の衆生が至心に信樂しんぎょうして、我が国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじ」と誓われています。但しこれには五逆と誹謗正法の人は除かれています。衆生は至心に信樂すれば、乃至十念によって極楽に往生できるというのです。次の第十九願には、「十方の衆生が菩提心を発こし、諸の功德を修し、至心に發願して我が国に生ぜんと欲せんに、壽終の時に臨んで、たとい大衆のために圍繞せられて其の人の前に現ぜずんば、正覺を取らじ」と誓われています。即ち菩提心を發した衆生が善根を修し、至心に發願して極楽往生を

願うならば、臨終の時に阿弥陀佛は大衆に圍繞せられて、その人の前に現われ、極楽に引接いんじょうするというのです。これは臨終に阿弥陀佛が迎えに来るというのですから容易ではありません。

第二十願は「十方の衆生が、我が名号を聞いて、念を我が国に係かけ、諸の徳本を植え、至心に廻向して、我が国に生ぜんと欲して果遂せずんば、正覺を取らじ」と誓われています。これは極楽に生れたいと思う人が、往生を願いつつ徳本を植えて、これに至心に廻向して往生を願えば、往生できるといいうです。以上の三願については、浄土教の論師たちにいろいろの解釈がありますが、本願に乗託する信が大切であると思います。

以上、大無量壽經を、阿弥陀佛のそなえる徳と、極楽の結構と、浄土の建立・浄土往生の因となる法蔵菩薩の本願との三方面から簡単に示しました。しかしなお多くの重要なことが残されていることは、言うまでもありません。

(東京大学名誉教授)